

# 人間にとって宗教とは

## 北東アフリカからの問いかけ

日本ナイル・エチオピア学会第15回学術大会は、2006年4月15日(土)、16日(金)の両日、愛知県の南山大学にて開かれました。15日には、「人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ」を全体テーマとして公開講演・シンポジウムを開催しました。

ここでは、下記のプログラムの中から、主催者による趣旨説明と6名の講演者の方々の講演を掲載いたします。掲載に当たって、口語的な言い回しを修正し、また、スライドを使った説明部分につきましても、紙幅の関係上若干割愛させていただきました。

### ◆プログラム◆

日 時：2006年4月15日 13:00～18:00

場 所：南山大学

シンポジウム趣旨 石原美奈子 (南山大学)

---

#### 第1部 基調講演：貧困・紛争状況のなかでの宗教のゆらぎ

---

エチオピア・青ナイルの修道院 — 風の中に神の声を聞く

山形孝夫 (宮城学院女子大学名誉教授)

政治化される宗教 — スーダンにおけるイスラームとキリスト教

栗本英世 (大阪大学)

---

#### 第2部 エチオピアの宗教：絶え間なき再生

---

変化する環境への適応としてのキリスト教受容

佐藤廉也 (九州大学)

精霊憑依と想像の空間 — エチオピア西南部ホールにおける伝統・近代化・女性の抵抗

宮脇幸生 (大阪府立大学)

不可視界を介した異教共存・融合 — 二つの精霊憑依の実例

石原美奈子 (南山大学)

記録映画「ヤアへの参詣 — 参詣の旅人と迎える人々」を制作して

松波康男 (南山大学)

---

#### 総合討論 (司会：山形孝夫)

---

#### 参加者

クネヒト・ペトロ (南山大学)・坂井信三 (南山大学)・富永智津子 (宮城学院女子大学)

栗本英世・佐藤廉也・宮脇幸生・石原美奈子

人間にとって宗教とは — 北東アフリカからの問いかけ

シンポジウム趣旨

大会実行委員長

石原美奈子

はじめに

おそらく北東アフリカを研究対象とする日本人の多くが、一度は現地で「あなたの宗教は何ですか」と問われた経験があるだろう。そしてその問いから、自分のアイデンティティあるいは日常生活において宗教が周縁的な位置を占めるにすぎないものであり、宗教というと冠婚葬祭の折に確認するか、あるいはせいぜい「困った時の神頼み」程度の対象でしかなかったことを思い起こすのではなからうか。また日本では「宗教かぶれ」「宗教にはまっている」という表現にも現われるように、宗教には「あぶない」「異常」というイメージがつきまとう。とくに近年、イスラーム世界では自爆テロ、タリバン、アルカイダなど宗教を名目とした政治活動が報道で大きく取上げられたこと、また日本国内でもオウム真理教や統一教会などが一時期メディアを騒がせてきたこともあり、そうした宗教に対する歪んだ見方に拍車をかけてきた。それに対し、おそらく北東アフリカの人々にとってはむしろ宗教をもっているのが当たり前で、宗教に対して無関心とまで言わなくとも無頓着な日本人の方が異常にみられるのではなからうか。

確かに日本国内、とりわけ都市で生活していると、定職をもってさえいればある程度の社会保障は得られるし、医療施設にもアクセスできる。生活上の不便を感じず、特段ストレスや悩みを抱えていない場合には、とくに「神頼み」もせずすむ。だが、国家が脆弱で安定した社会保障が得られない場合、頼るべきものは神ばかりという状況は北東アフリカでは日常的な現実である。絶対的な食糧不足や病苦、絶え間ない争いとそこで再生産される憎悪等、日常生活を脅かす危険と隣りあわせの生活を送る北東アフリカの多くの人々にとって、病や貧困からの癒しや、隣人愛に裏づけられた共生を希う人間の根源的な感情から生まれた宗教が日常生活において重要であるのはむしろ当然のことなのかもしれない。

本シンポジウムで発表者となっている6人は、北東アフリカの特定地域で調査研究を行っている。そのなかで宗教学が専門で北東アフリカのキリスト教の比較研究をされている山形先生以外は、主たる研究対象は宗教自体ではない。それなのに、宗教や神霊観念を研究の視野に入れざるを得ないのは、それが日常生活と密着しており、それなしで人々の象徴的世界を語るができないからである。

貧困・紛争状況のなかでの宗教のゆらぎ

北東アフリカは、日本では貧困と紛争の代名詞のごとく語られてきた。そこで宗教的特色は、中東・北アフリカとサブサハラ・アフリカの狭間にある、という地理的特徴から、前者で発祥・発展した一神教と、後者が保持する民族固有の神霊観念の双方を併せ持っているという点である。エチオピアでは、キリスト教が4世紀に導入されて以来、ユダヤ教の儀礼的・典礼的要素を保持しながら、エジプトのコプト教会の強い影響下で独自の教義・儀礼体系を作り上げたエチオピア正教会が北部高地を中心に展開した。講

演者の一人、山形孝夫先生は、エジプトのコプト教会の修道院での調査をもとに、清貧の生活を選んだ人々の精神世界を比較宗教学的観点から描いた傑作『砂漠の修道院』（新潮選書 1987年）の著者である。今回のご講演でも、コプト教会と歴史的に強い繋がりを持ちながら、修道院のあり方の点では対照的であるエチオピア正教会に焦点をあてて、神と信者に奉仕するために清貧の道を選んだ宗教者の豊かな精神世界をご紹介しますことと思う。

また7世紀紅海を挟んだ対岸のアラビア半島で発祥したイスラームは、早い時期に北東アフリカに伝わり、エチオピアでは東部を中心に受け入れられた。イスラームは、受け入れ社会の価値観や神霊観念と融合し「土着化」されながら緩やかに浸透・普及した。そのため、16世紀にアフマド・グランニがキリスト教徒の帝国に対してジハードを展開した以外は、エチオピアではキリスト教徒とムスリムが棲み分け・共生する独特の社会が成立した。

一方、エチオピアの西隣のスーダンでは、4世紀以降にキリスト教を受容したヌビア人の王国がムスリムの進出により15世紀に倒れた後、北部ではフンジュやダールフルなどイスラーム的政体が、南部の諸民族からの経済的搾取の上に繁栄した。この南北の政治経済的な優劣・支配/搾取の関係は、独立後のスーダンにも踏襲され、スーダン南部は長らく紛争の舞台となった。もう一人の講演者の栗本英世先生は、紛争に巻き込まれ、紛争当事者となったスーダン南部の人々の間で調査を行ってこられ、紛争状況のもとで生きる人々を描いた民族誌の傑作『民族紛争を生きる人々』（世界思想社 1996年）の著者である。宗教は、個人の内的的信仰にかかわる部分と、ある種の集団や政治的立場を規定する要素ともなりえるが、紛争状況下のスーダンにおけるイスラームとキリスト教は、対立する当事者の二極化を形容し特徴づける象徴として用いられてきた。

### エチオピアの宗教：絶え間なき再生

後半のシンポジウムの発表者は、エチオピア西部および南西部で現地調査を行っている研究者で、そのうち3人は昨年3月に公開された『社会化される生態資源 エチオピア：絶え間なき再生』（福井勝義編 京都大学学術出版会）の執筆者となっている。同書では、エチオピア南西部の諸民族が地理的に隔絶されているようにみえながら、近代化やグローバリズムの影響を確実に受け、それに対して柔軟に対応しながらさまざまな生業上の生存戦略を編み出している局面を「生態資源を社会化する」試みととらえている。シンポジウムの方では、近現代の政治体制の変動のもとで「再生」されるエチオピアにおいて、政治経済面では「周縁」でありながら、あるいは「周縁」であるからこそ社会文化的多様性を維持し続けてきた南西部の諸社会において、世界観や宗教面ではどのような「生存戦略」がみられるのか、について論じていただく。

エチオピアの二大宗教がキリスト教とイスラームであることは間違いないが、自然の諸条件に阻まれてキリスト教・イスラームの双方からの影響を免れた南西部では、少数民族がそれぞれの生態自然環境や社会に根ざした多様な神霊観念を生み出し、時代の趨勢に応じて変容を遂げながらも今日までそれらを保持してきた。

19世紀末から20世紀初めにかけて、北部高地を中心に発達したエチオピア帝国が南部諸民族を征服し、政治経済的な支配と搾取の対象としたことは、南部諸民族の人々の精神世界に多大な影響を及ぼした。これら「周縁」社会での宗教の多様性と変容をみることによって、「絶え間なく再生」されるエチオピアの宗教的特殊性が明らかになる。これら諸社会は、キリスト教やイスラームの影響を受けながら、それを一方的に受け入れるのではなく、自分たちの社会に見合う仕方に改変しながら取り入れている（あるいは受け入

れを拒絶している)。また、政治経済面で「周縁化」される諸社会で生じる人々の葛藤や軋轢を表現する媒体として、憑霊現象を発達させている社会もある。

エチオピアで調査生活を送っていると、日常生活の中に非日常の出来事(災害・病・死)が濃密に潜在していることを実感する。そして私たちならば、自然現象としてあるいは生理学的な偶然として理解しているであろうこれら非日常の出来事を、人々が不可視界との関連で因果関係を理解したがる瞬間にしばしばでくわす。日常の生活空間への不可視界からの介入や人間世界と不可視界との交流は、多様な仕方でもイメージ化されるが、不可視界の想像=創造のされ方は、想像=創造する人間の社会のあり方や歴史的過程と密接不可分な関係にある。だが、不可視界の存在への人々の依存を支えるのは、不可視界のそうした人為的・創作的側面ではなく、むしろそれが不可避的・必然的性格を帯びているからである。これは私見にすぎないが、こうした不可視界の存在への依存度の高さが、人間の根源的価値観ともいえる癒しや共生・愛に重きを置いたエチオピア特有の宗教のあり方を形作っているのではあるまいか。

## おわりに

イスラーム世界にみられる復興主義、あるいはキリスト教にみられる原理主義といった潮流に特徴的に見られる、原典主義や同一宗教内での刷新運動は、宗教の教条主義的な見方の偏重によるところが大きく、これは必然的に異教徒に対する非妥協的姿勢に繋がる。一方、エチオピアの宗教的特質は、一神教を導入した後でも異なる宗教信徒の間での融和・共生が可能となっているところで、これは、宗教を支える根源的価値観に重きを置いた人間中心的な宗教のあり方といえる。人間にとって宗教とは何か。エチオピアの宗教のあり方は、復興主義や原理主義に傾倒する一神教諸社会に限らず、宗教が日常生活のなかの周縁にすぎない多くの日本人にとっても、人間にとって宗教とは何かについて再びみつめ直す契機となるのではなかろうか。

(いしはら・みなこ/南山大学)